

入試にも囲碁史は役立つ!?

古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

古代から近世まで中国では、科挙と呼ばれる官僚登用の試験が行われていて、身分を問わず試験で良い成績を上げたものは出世することが可能だった。

唐代には囲碁の達人の官職「棋待詔」が設けられ宋代に入ると官僚の中でも「士大夫」と呼ばれる階層に「琴棋書画」の四芸が奨励され、棋(囲碁)の上手は文人として尊敬を集めた。

現代においても囲碁の素養は試験に役立つことがある。2年前の慶應義塾大学の入試問題(日本史)で、囲碁にちなんだ長文の出題があった。以下はその抜粋である。

〔(前略) 日本に囲碁が伝来した経緯については諸説あり定説は存在しない。しかし()の没後、その皇后であった人物により東大寺に献納されたこととされる、碁盤(木画紫檀碁局)が収蔵されていることから、遅くとも8世紀中頃には伝えられたと考えられる(後略)〕

カッコ()の中の解答は選択肢から選ぶ形式で、正解は「聖武天皇」。この後も近代まで続き、江戸時代の棋士で暦学者の「安井算哲」(幕府初代天文方の渋川春海)や大正から昭和の囲碁愛好者も解答になっている。

筆者も遊戯史の講義を受け持っているが、遊戯と文化、社会情勢を関連付けることで歴史の理解を深める一助になるだろう。

写真は渋川春海が江戸時代に残した天文図の掛軸
(アミュージュメント産業研究所所蔵)



やさしい 囲碁史

第27回

浮世絵に見る囲碁

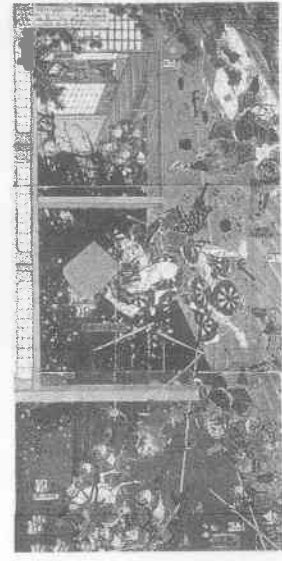
古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

囲碁が登場する日本の絵画といえば、平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれたとされる「源氏物語絵巻」や「鳥獣人物戯画」、「吉備大臣入唐絵巻」などが有名だ。

こうした絵巻は現在では国宝級の貴重品ばかりだが、近世に入って囲碁が貴族や僧侶だけでなく庶民にも普及していく過程で、さまざまな形で囲碁が描かれるようになっていった。

江戸時代に入って天下が安定するとともに印刷技術の進歩で、浮世絵が作られるようになった。もともとは平安時代に生まれたとされる国風文化「大和絵」(やまとえ)の流れをくんでいて、日常生活や風物を題材に文字通り「浮世」(憂き世)を描いているのが特徴である。木版を利用した浮世絵の版画は数多く刷ることで価格安くでき、大衆にも手の届く芸術作品となった。

現代に伝わる浮世絵の中でもよく取り上げられるのが、いわゆる「碁盤忠信」で、多くの浮世絵師が作品の題材とした。碁盤忠信は源義経の忠臣、平家追討などで活躍した佐藤四郎兵衛忠信のこと



歌川芳員作の浮世絵「佐藤四郎兵衛忠信」
(アミュージュメント産業研究所所蔵)